

(1) プログラム内容

10:00 開会の挨拶・趣旨説明（小林教授）

10:10 実習参加者の報告

- ・ 「復興——計画から考える——」
- ・ 「陸前高田の人々の想い」
- ・ 「暮らし」
- ・ 「陸前高田の子どもと高齢者」
- ・ 「未来へ伝える」

13:30 開会の挨拶・趣旨説明（熊谷教授）

13:40 地域研究実習Ⅱ活動報告（佐藤文香）

14:00 各講演

實吉義正さん（陸前高田観光物産協会副会長）

「語り継ぐ あの日・あの時、そして今から明日へ」

佐藤一男さん（陸前高田市米崎小学校仮設住宅自治会長）

「陸前高田市 被災者のコミュニティー 第3ステージへ」

三井俊介さん（特定非営利活動法人 SET 代表理事）

「新しい生き方、働き方を創る～陸前高田市広田町での挑戦～」

16:40 全体討論

18:30 終了

(2) 総括

今年のグロ文企画を実施する上で、専門用語の Glossary を配布するなど海外の学生がより主体的に参加できるように様々な準備をした。その甲斐あってか、午前中の報告会においても多くの質問が海外の学生から出され、活発な意見交換がなされた。午後の全体討論では海外の学生一人ひとりに感想を述べてもらう場を作ったが、その感想内容からも海外の学生たちがいかにこのプログラムの中で講演を真剣に話を聞き、震災について深く考えてくれたのかがわかった。海外の学生のみならずお茶大生にとっても難しい内容ではあったと思うが、意義のあるプログラムであったと思う。

3月10日（火）シンポジウム「震災の記憶を語り継ぎ、今、陸前高田から考える」配布資料

活動報告

2015/03/10 国際フォーラム
お茶の水女子大学
グローバル文化学環2年 佐藤文香

アウトライン

- 1. 地域研究実習とは
- 2. 実習参加者の声
- 3. 私達にできること

ちいきげんきゅうじっしゅう
地域研究実習IIとは

2011年10月開始
年に5-6回訪問 各回学生5人

- ・ **目的 -aim-**
陸前高田市の復興支援に参加する
実体験を通じた多様な学びを
- ・ **事後活動 -following activities-**
- 報告会での報告
- 3月に行われる震災シンポジウム
- 報告書の執筆

2012年度 陸前高田市
「地域研究実習II」報告書

お茶の水女子大学
文教育学部 グローバル文化学環

東日本大震災
聞き取りからみえる

ふうけい
①陸前高田の風景を見る
Seeing the scenery

②お茶っこカフェの開催
Holding a tea party

米崎小仮設住宅にて

③米崎小仮設でのイベント開催
Holding events

夏祭り、お団子作り、クイズ大会、ビンゴ大会など

皆で高田音頭を踊りました！なつまつ

お母さん達に教わりながらお団子作り

夏祭り

団子作り

④聞き取り
Hearing investigation

- ・陸前高田市役所
- ・若興人の家
- ・気仙沼大工左官伝承館
- ・八木澤商店
- ・未来商店街
- ・りくカフェ
- ・NPO法人桜ライン311
- ・陸前高田災害FM
- ・広田小仮設住宅
- ・長洞元気村



陸前高田災害FMにて



陸前高田市役所にて

実習参加者の声

「自分がいかに“被災地”というものの先入観(prejudice)を持っていたか気が付いた」

「実際に訪れて、その地域の方々から直接お話しを聞くことの重要性 (importance)を知った」

「陸前高田のエネルギーを強く感じた」

陸前高田へ行って

- ・自分で作り上げた町を直接見て、話を聞か



「陸前高田のことが好きになった」

「思い出のある街になった」

陸前高田という街

人のあたたかさ

kindness of people



米崎小仮設住宅にて



りくカフェにて

繰り返し訪れることの重要性
Importance of keeping visiting

陸前高田という街
地域のつながりの強さ
strong connection of people in Rikuzentakata



「陸前高田にこれからも関わり続けていきたい」

「私達にできることはなんだろうか」

学んだことを伝える、実践する

- 学祭での出店
launching a store in school festival
→陸前高田の名産品の販売、陸前高田に関する展示
- 避難所体験の実施
refuge trial



私たちにできること

What we can do for Rikuzentakata

- 学んだこと・知ったことを伝える、実践する
(practicing what we learn)
- 一度ではなく繰り返し訪れる
(visiting)
- 「これからも」考える、向き合う
(keeping thinking)

ご清聴ありがとうございました
Thank you for listening



広田町 大野海岸

復興 一計画から考える一

大塩みなみ 遠山未来 渡辺ひとみ 吉田敦子 立野恭子

Agenda

- ✓ 仮設住宅から公営住宅へ
- ✓ 東京や被災地それぞれで感じる復興のズレ
- ✓ コミュニティの作り方という視点から考える復興
- ✓ うごく七夕祭りから考える復興
- ✓ メディア報道と被災地とのギャップから生じるズレ

仮設住宅から公営住宅へ



- 2,200戸の住民が仮設住宅(temporary housing)
- 自力再建が難しい人、高齢者など ⇒ 公営住宅へ移転
- 市は、公営住宅として**約1,000戸**つくることを予定

2014.6. 市役所より

仮設住宅から公営住宅へ

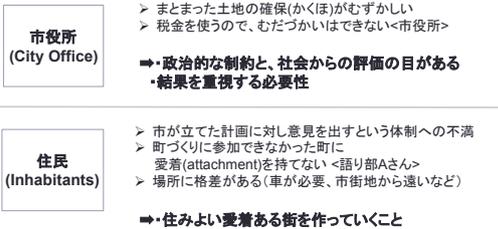
●どんなステップを踏んでいくのか？



2014.6 市役所より

みえてくる問題点

●双方に考えられる問題点



考察

●考えうる改善案

- 計画に関わる政治的な制約を知り、現状をシビアに見る目を養うこと (住民側)
- 発案から決定まで、計画の過程を可視化すること(行政側)
- 双方の立場からの現状を把握できるようにすること

●今回の実習では把握しきれなかった点
(⇒ミクロ的な視点からの把握が必要であることを痛感した。)
・地元紙・地元テレビなど、住民の主な情報収集手段
・住民の中の、現在の復興計画に賛成派・反対派の意見
・市議会がどう関わっているか
・行政側は住民の意見などを、どう認識しているか

東京にいて感じる復興と 現地にいて感じた復興のズレ

●東京にいて感じる復興

⇒徴音祭(きいんさい)で陸前高田物産展
(ぶっさんてん)を行ったとき...

- ・「まだ震災関係のことやってるんだね～」
- ・「陸前高田市ってどこにあるの？」

陸前高田で昔から愛されているお菓子、「がんづき」
を作って販売しました。



東京にいて感じる復興と 現地にいて感じた復興のズレ

●東京にいて感じる復興

- 東京の多くの人にとって震災は、過去(かこ)の出来事(できごと)の1つ
- 震災(しんさい)・復興(ふっこう)への関心のうすれ
- 自分たちは「外部者(がいぶしゃ)」関係ない存在(そんざい)

東京にいて感じる復興と 現地にいて感じた復興のズレ

●現地にいて感じた復興

⇒6月実習 語り部紺野さんによる市内あんない

「新しいふるさとにするためには、自分たちの手で復元(ふくげん)しなければならない。そうやって、愛着(あいちゃく)が生まれる」



⇒6月実習 八木澤商店9代目河野通洋社長
「本当に軽いきもちで、陸前高田に来てほしい。そうじゃないと来られないでしょ」



東京にいて感じる復興と 現地にいて感じた復興のズレ

●現地にいて感じた復興

- 現地の復興は、決して外部の人主体(しゅたい)であってはならない。
- しかし、外部者(がいぶしゃ)が関わる事が陸前高田の復興には必要。現地の人の思いを一番に。

東京にいて感じる復興と 現地にいて感じた復興のズレ

●そのズレをふまえた上で、外部者である私たちはどうするべきだろうか？

- ほそく、ながく関われる陸前高田へのアクションを取ることに。
- わすれられてしまうことを一番おそれている。



東京にいて感じる復興と 現地にいて感じた復興のズレ

●そのズレをふまえた上で、外部者(がいぶしゃ)である私たちはどうするべきだろうか？

- 今回は被災(ひさい)しなかっただけで、決して自分たちに関係がないという意識(いしき)を捨てる。震災(しんさい)はだれにでも起こりうるという危機意識(ききいしき)を持つこと。被災地(ひさいち)のいまの状況にアンテナをはる。

コミュニティの作り方という視点から

住環境の違い

- ・ 広田の仮設住宅
地縁 (regional relation)
血縁 (blood relation)
- ・ 長洞の仮設住宅
外部からの支援とつながり



コミュニティの作り方という視点から

新たな商業地域

- ・ 陸前高田未来商店街
(regional shopping street)
利用者について
- ・ イオン (urban shopping center)
酒税・高齢者について



画像: 流通ネットより

コミュニティ内の課題と解決策

- ◆ 家から出ることのできない人のメンタルケア
りくカフェ・各集会所や祭りなどのイベント
- ◆ 雨対策
水はけの良い土壌づくりをしたい
- ◆ 仮設住宅の横のつながり
他の仮設との交流ネットワークを構築したい
- ◆ 外部者の役割・関わり方

うごく七夕まつり(2014年8月7日)

陸前高田につづく伝統的な夏のお祭り
外部の人間が地元の祭りに関わるなど

東京において、ニュースから知る「復興」
住宅、インフラ、資金不足の問題etc...

町の伝統・文化を通してコミュニケーションを守っていく



祭りをつづけることの意味

- ・ 七夕まつり
→時代の移り変わり、震災を経て、外部の力なしにはつづけられない状況
- ・ 文化や伝統という側面から「復興」をかんがえる

メディアが発信する情報と、 現地の状況のギャップから生まれるズレ

例①仮設住宅

- メディア: 新たな生活を始めた人を取り上げる
- 現状: 仮設住宅に未だ9割の人が住んでいる



例②お店

メディア: お店を再開したことを報道

現状: 再開できても5年以内に撤去しなくてはならない場合もある



現地の状況の**一部**を取り上げ、あたかもそれが**全て**であるかのように報道

(解決策)

- ・現地を知る
- ・情報を自ら吟味する



まとめ

復興における

『計画・東京・被災地コミュニティ・祭り・メディア』
という側面から4年経った今、考えられること

共通している点は

被災地の情報を「受信する側」が偏見をもたず
に受け取り、それを考え続け行動することができるかということ

2015 3 10 ()

-

-
-

()



-

→

-

→

-

→

→

...

-

()

-

陸前高田の人々の想い

高橋詩織 シャチクリ・メルシヤト
高口智美 徳光美緒 佐藤文香

1

アウトライン

- 1、はじめに
- 2、団体へ訪問して感じたこと
- 3、個人への聞き取りから感じたこと
- 4、まとめ 私達が考えたこと

2

はじめに

- ・聞き取りをする中で直接お話を聞かなければわからない多くの“想い”を聞いた
- ・表になかなか出てこない感情→なぜか
- ・震災から4年経つ今、陸前高田の方々の想いに着目することが重要なのではないか

3

Aid TAKATA

それぞれの想い

4

Aid TAKATA

- ・震災をきっかけに設立
- ・「Build back better」
これを“機会”に、世界のTAKATAへ

その背景には...

- ・生まれた誇り
- ・「自己実現」としての仕事を

5

陸前高田災害FM

- ・ **コミュニティFM**としての展望
“つなげる”>情報発信
(例) 安否確認、縁を繋ぐ
- ・ 被災者であり、支援者としての姿勢
「高田にこだわる」「高田の声を届ける」

6

陸前高田うごく七夕まつり



川原まつり組会長 佐々木さんからの聞き取り

7

人々にとっての七夕まつり

- まつりに関わるのは当たり前
子ども、大人、お母さんそれぞれの役割
- 12の地区ごとの山車
(森前、大石、鳴石、駅前、中央、大町、荒町、
和野、松原、川原、長砂、沼田)

あつて当たり前であり、地域を結ぶ
大切な存在



震災後 after the earthquake

- だし
- 山車 (float) が流される (12台のうち9台)
 - 人手不足 shortage of hand
 - 資金不足 shortage of money

→ 様々な問題に直面 facing problems
“有志の集まり”によるまつりへ

9

震災後の七夕まつり

- 人手不足
→ 外部の人 (ボランティアなど) で補う
- 山車の数 (2014)
→ 11台の山車が参加 (8台の山車が復活)
- 資金
→ 町内会の費用で運営 (川原まつり組の場合)

10

今後の課題 problems from now on

- 市街地 (urban area) の嵩上げ
→ 山車が通れる道はあるのか
- 高台移転
→ 地区ごとのコミュニティが崩れる
まつり組はどうするのか

11

まつりへの想い

「まつりを続けたい」

「これからのことはどうなるかわからない」

「なるようになる」

12

聞き取りから

陸前高田で聞き取りを行うなかで、よく聞いた言葉

「来てくれただけでありがたい」

「子どもたちのため」

「伝えてください」

13

「来てくれただけでありがたい」

→ 陸前高田の観光資源が津波で失われてしまったため、陸前高田に来てくれただけでありがたい、という想い。

→ 約4年という時間のなかで、“やはり当事者以外から震災の記憶はどんどんなくなっていってしまうのだ、という想い。

14

「子どもたちのため」

生活や復興の方針に大きく関わる。

- ・次の世代に今回の教訓をのこす。
- ・通学に不自由が生じる。
 - 仕事場で子供の面倒を見る。
子供の学校にあわせて住む場所を決める。
- ・仮設住宅で暮らす子供たちのストレス。

15

「伝えてください」

「ここで見たことや聞いたことを東京に帰って伝えてくださいね。」

- 確かに、東京にいるときに予想していた様子と違う。
- 他の地域も、この教訓を生かして災害に備えるべき。
この教訓を忘れてはいけない。

16

以前にも大津波が来たことがあるにも関わらず、大きな被害を受けた。
3.11を忘れてはならない。
次こそ、防がなければならない。

人々の姿に、
「子どもたちに未来を見る」
「繰り返してはならない」
ということを強く感じた。

17

住居について

仮設住宅

- ・「仮設に入ったらプライバシーがない」
- ・「集会所などで皆と集まって話すことが大事」



災害公営住宅

- ・「皆がバラバラになってしまう」
- ・「災害公営住宅に移った後のほうが大変」
- ・「仮設のほうがいい」
- ・「コミュニティが崩れるのではないか」

→ 今後のことを不安に思う声が多数
anxiety about the future

18

陸前高田の風景

市街地 埋め立て
reclamation of urban area



「道路だけでも、愛着のある風景」

19

陸前高田の風景

嵩上げのためのベルトコンベアー
Conveyer belt for raising land



「異様な風景」

20

陸前高田の風景

防波堤について

山側の人が海側に住む人よりも
亡くなったという事実
「海が常に見えるから」



海への畏怖 awe to the sea
→高い防波堤をたてることで無くなる？

21

3年という時間がもたらしたもの

- ・「やっと震災と向き合えるようになった」
- ・「やっと震災について話せるようになった」
- ・「ようやく実感が湧いた」

- ・「今になって外に出られなくなった」
- ・「先が見えてこない」

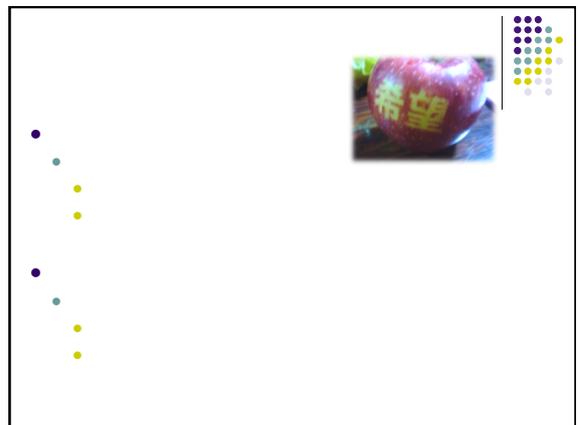
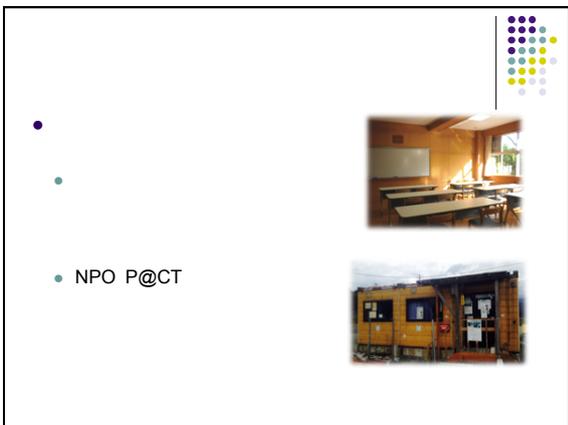
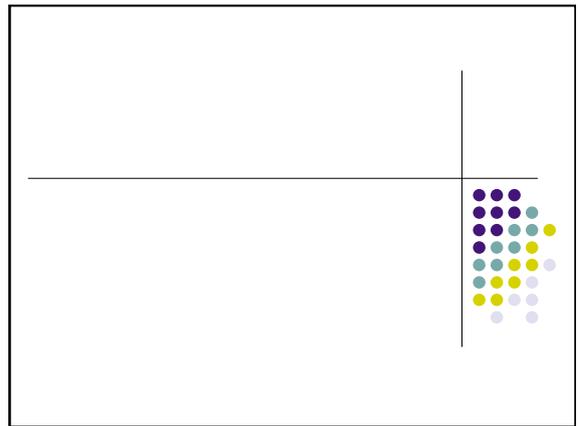
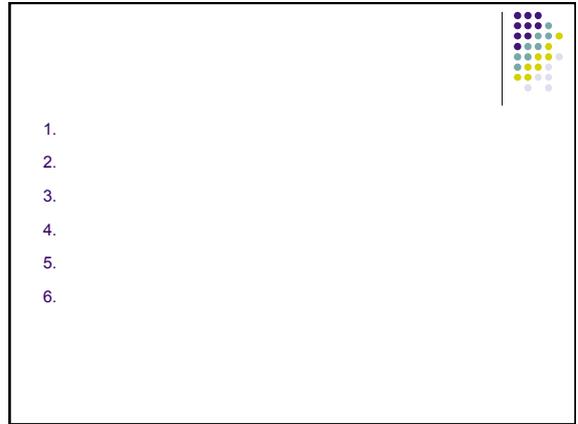
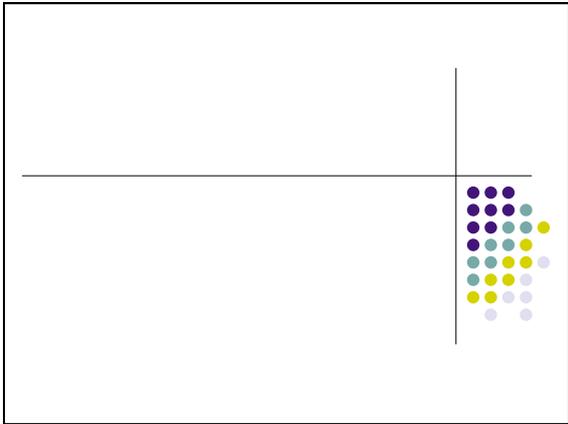
「気持ちの復興はまだまだ進んでいない」
「心のケアが何より大事」

22

まとめ 私達が考えたこと

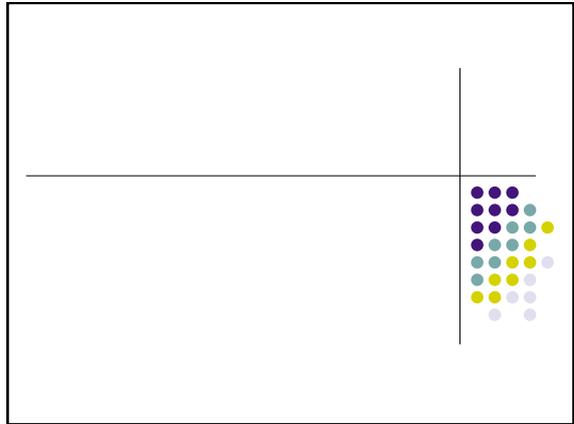
- ・我慢、あきらめ・・・表に出さない感情の存在
→精神面のサポートが重要
Importance of support for the mental health
- ・実習の聞き取りの中で聞いた皆さんの“想い”は
ほんの一部でしかない
→様々な思いを抱えこんでいる人が多いはず
- ・目に見える変化だけで「復興した」と考えないこと

23



• 3 ...





• 900



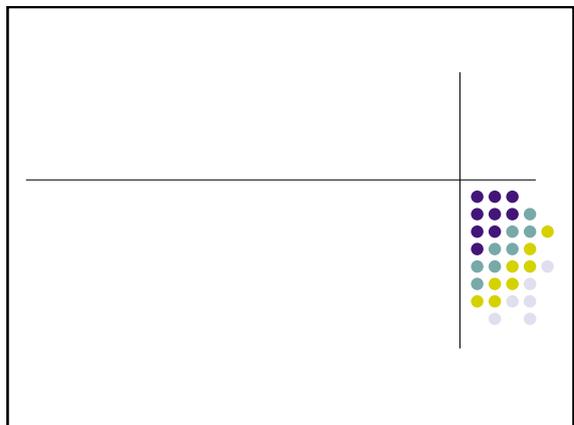

• →

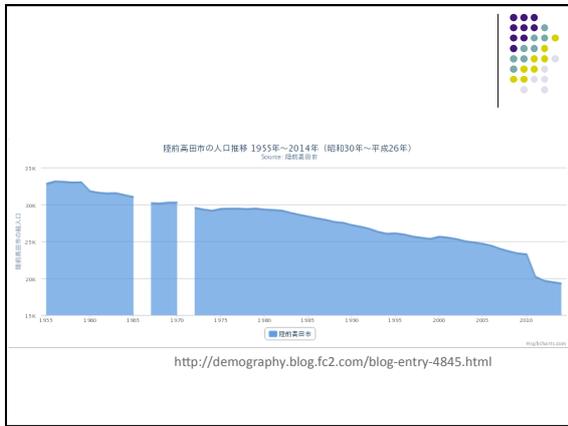



100 20 50
→30

→







SAVE TAKATA

IT

-
-



-
-
-
-



-

(Wikipedia)

-
-
-



未来へ伝える

内山みどり、坂上璃紗、陳思羽、久保田有香子

①陸前高田と私たちをつなぐ

- ・陸前高田災害FM
- ・桜ライン3.11

②陸前高田から私たちへ

- ・イベントと外国人
- ・震災の語り部

陸前高田と私たちをつなぐ

陸前高田災害FM

陸前高田災害FMの役割



陸前高田災害FM 2015年1月 タイムテーブル

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日	
09:00	情報 every・陸前高田 (生放送) ～陸前高田市内の情報、市/団体/企業等からのお知らせ・イベント情報・お天気情報など～ (60分)							再放送タイム (過去の番組)
10:00	ラジオ広報りくせんたかた (陸前高田市役所からの行政情報など・30分) ラジオ広報おあるなど (大船渡市役所からの行政情報など・30分)							行政
11:00	音楽タイム! (演歌・歌謡曲の特別)							その他の番組
12:00	情報 every・陸前高田 (録の再放送)							再放送タイム (過去の番組)
13:00	ラジオ広報りくせんたかた・ラジオ広報おあるなど (月・水～木・各30分・再放送)							行政 (再放送)
14:00	いびつての野良なし (旭光・氣山、若手 陣内の結婚の相談)	外灘(放送の時間) (中継と実況による 1～7番組)	あな木育先生と若 新藤信先生の「言葉 の達人講座」	! 藤のゆ.com (調音)	気仙のじいちゃん (調音)	ぼつととらつとら 「今、伝えたいこと」 藤がたの	ぼつととらつとら 「今、伝えたいこと」 藤がたの	
15:00	川崎野矢 (生放送・月 2回)	川崎野矢 (生放送・月 2回)	川崎野矢 (生放送・月 2回)	3あの人この人 高田 (月1回)	3あの人この人 高田 (月1回)	3あの人この人 高田 (月1回)	3あの人この人 高田 (月1回)	
16:00	音楽タイム! (J-POP、洋楽、JAZZなど)							再放送タイム (過去の番組)
17:00	情報 every・陸前高田 (生放送) ～陸前高田市内の情報、市/団体/企業等からのお知らせ・イベント情報・お天気情報など～ (60分)							再放送タイム (過去の番組)
18:00	ラジオ広報りくせんたかた・ラジオ広報おあるなど (各30分・再放送)							行政
19:00	再放送タイム (3か月以内に放送した番組の再放送・24時間ずっと陸前高田の番組をお楽しみください!) (月曜日～金曜日・19時から翌朝9時まで) (土曜日・19時から日曜日午前9時まで)							行政

ラジオで伝える

もちろん地域の中へ

そして地域の外へ

さらに未来へ

伝える—地域の中へ

- 生活に欠かせない情報
行政情報
- 震災によって再認識される共生
外国語、障がい者による放送
- 陸前高田の未来を担う若者の力
学生、ミュージシャンによる放送
- 地域の外から陸前高田を思う声
支援ボランティアの出演

7

伝える—地域の外へ

- かつての陸前高田を思い出す
昔ばなしの放送
- 陸前高田の人々の声
市民ゲスト、スタジオ外での放送
- 生活者による復興の「いま」
参加型かつ柔軟な放送
→日常の語りに垣間見えるふるさとへの思い

8

伝える—未来へ

多様な視点からの番組作りと
市民による番組への参加。
大きなメディアが拾わない
小さな出来事を絶えず発信し続ける
陸前高田災害FM。
ラジオが伝える「いま」、「昔」を積み重ねて
未来につなげていく。

9

陸前高田と私たちをつなぐ

桜ライン3.11

10

桜ライン3.11

- 陸前高田市の津波到達点上に桜を植樹し、
震災を後世に伝える

2011年10月16日	任意団体桜ライン311設立
2011年11月6日	団体初の植樹会を開催
2012年5月1日	特定非営利活動法人桜ライン311
2013年3月9日	植樹実績累計500本を突破
2013年7月1日	岡本翔馬・代表就任
2014年5月1日	認定特定非営利活動法人桜ライン311として認定

11

桜ライン3.11

- 「後世に津波がきたことを残すとともに、人と人をつなぐ役割にもなってほしい。災害を自分事と感じ、どのようなアクションを起こせるか、大切な人をどう守るかを考えてほしい」
代表岡本さん

2013年11月10日東海新報www.tohkaishimpo.com/scripts/index_main.cgi?mode=kiji...

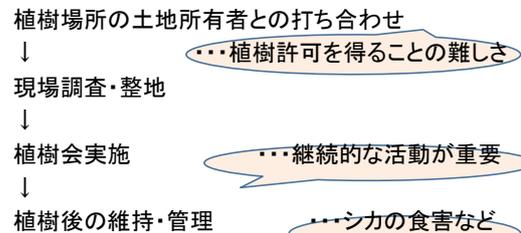
12

伝える① 植樹活動

- 植樹本数: 718本(2014/8)→767本(2014/12)
- 目標本数: 17000本(約170km)
- ボランティア参加人数: のべ2136名
- 2015春の植樹会は、定員を超える応募



植樹の流れ



14

伝える① 植樹活動

◆植樹活動を通して伝える

- 地震時の避難する目印になる
- 外から来た人が、津波の高さを知り、災害を自分事として考えるようになる
- 植樹に来た人が、継続的に陸前高田に関わるようになる

15

伝える② 「あの街に桜が咲けば」

- 監督の小川光一さんが中心となり、2014/03/01より全国公開開始
- 累計上映会場: 110、概算動員数: 11000人、30都道府県突破見込
- 桜ライン3.11の活動や、それに関わる人々へのインタビューを通して、震災を経験した人の思い、命の尊さを伝える



伝える② 「あの街に桜が咲けば」

◆映画を通して伝える

- 「家族と来ればよかった」、「自分の街でも上映したい」という感想が多い
→家族・友人を連れて、再度上映会に参加する人、植樹会に参加するきっかけ
- 一方で、「防災対策をしていない」という人もおり、災害を自分事と考えていない人も多い
→今後、どのように伝えていくかが課題

17

桜ライン3.11の活動から

- 伝える側の思いと、受けて側の意識の違い
→「伝える」ことで、意識の差を縮める
- 震災後のさまざまな取り組みが減り、風化が進んでいる
→桜ライン3.11の活動は、植樹の完成だけでなく、継続して「伝える」ことが重要なのではないかと

18

陸前高田から私たちへ

イベントと外国人参加者としての体験

19

イベントⅠ：あゆの里まつり

- ・川の駅横田を会場に開かれる秋祭り。
- ・気仙川産天然あゆの塩焼きや郷土料理が食べられた祭りである。
- ・地場産品の展示即売と郷土芸能など見られた。



元気よく子供達

20

あゆの里祭り

1. 共同：宮城教育大学の留学生たちと一緒に超長巻き寿司を作った。
—異文化交流をしながら、協力の力を実感した。
—外来者の力を借りて、空間を超えて、陸前高田から世界へ発信するための努力。
2. 産品展示即売と陸前高田写真展
—地域とのつながりを通じて、再建の努力を伝える

21

イベントⅡ：さんま祭りと国際交流パーティー

- ・JICAの実習生たちと米崎小学校仮設住宅に住んでいらっしゃる方々と一緒に行ったイベントである。



22

さんま祭りと国際交流パーティー

- ・住民たちは外国実習生たちと言語を通じてなくても、一緒にゆっくり聞いてくれたり、いろいろなことを話したり、気楽に過ごした。
—言語と関係なく、元気よく、悲観的ではない生き方を実感した。
—私たちは持って行くというより、向こうからもらった感じがある。(伝えたいより、むしろ伝えられたことが多い)

23

さんま祭りと国際交流パーティー



24

災害FMと平山ナナさんとの出会い

- ・平山奈々さんは阿部恵美さんの協力をもって、FM番組をやっている。
- ・FMで、陸前高田に住んでいる被災した中国の方々を情報を伝えて、安心させるため。
- 国境を超えて、災害に対して、一緒に向き合う心を伝えること。
- 言語の力を通じて、空間を超えて、世界へ発信すること。

25

陸前高田から私たちへ

震災の語り部

26

未来へ語り継ぐ陸前高田 ～陸前高田観光ガイド～

27

語り部の概要

- ・ 陸前高田市観光物産協会の窓口から、震災の語り部の予約をする。
- ・ 観光バス、タクシー、乗用車、レンタカーなどで市内を移動しながらガイドを行う。
- ・ 一本松、旧市街地、旧道の駅などを約1～2時間かけてまわっていく。

28

未来へ語り継ぐ陸前高田
～陸前高田観光ガイド～

項目	内容
1	陸前高田の歴史と文化
2	震災の語り部
3	観光ガイド
4	観光物産
5	観光施設
6	観光交通
7	観光情報

29

今を生きる人に伝える (1)

- ・ 被災地を、震災を体験した人の話を聞きながら歩いてみる。
→ 紙面や画面を通した情報からは得られないリアリティを得る。
- ・ 津波への想像や防災意識など、自分に近づけて考えるきっかけとなる。

30

今を生きる人に伝える (2)

- 陸前高田の**歴史**、**震災の被害**、**現在**を知る。
→ 「陸前高田＝被災地」と完結しない。
- 陸前高田に魅力を感じることで、**再度訪れる**可能性が高くなる。

31

未来に語り継ぐ

- 人から人へ、ダイレクトに伝えていくことで、より**大きなインパクト**を聞き手に与える。
→ 長期的に人の記憶に残る。

32

まとめ

「伝える」「発信する」「語り継ぐ」

33

まとめ (1)

ラジオ：言葉の力を発揮する。

桜：津波被害を減らす願いが託される。

異文化交流：世界に発信する。

語り部：薄れつつある震災の記憶を守る。

34

まとめ (2)

- 人から人へ、それからまた別の人へといった「**伝える**」連鎖が大切。
→ 「伝える」ことの**未来へ向かう役割**が大きくなっている。
- 震災の記憶を風化させないためにも、私たちが教訓を生かすためにも、陸前高田のことを**発信**していくべき。

35

まとめ (3)

- 被災体験のない私たちができる発信とは？
 - ① 発表・報告会を開く(**アカデミック**)
 - ② 訪れて感じたこと、現地で撮った写真(特に風景)、人とのつながり・・・などの経験を定期的にSNSに投稿する(**日常の実践**)
 - ③ 日常生活の中で、「震災」についての意識を共有する「場」や「雰囲気」を率先して作る役割となる。

36

ご清聴ありがとうございました！

語り継ぐ あの日・あの時、そして今から明日へ

陸前高田市観光物産協会 實吉義正

○東日本大震災

平成 23 年 (2011) 3 月 11 日

《地震 PM2 : 46》 マグニチュード M9 観測史上初、世界 4 例目
震度 6 弱、宮城県栗原市…震度 7

《津波第一波 PM3 : 21》

- ・最大波高……………17.6m
- ・最高遡上高……………21.5m
- ・進行速度……………時速 40~50km
- ・河川遡上距離…………約 8km

- ・建物被害…………全壊 3,159 棟、大半壊 97 棟、半壊 85 棟
- ・浸水面積…………約 9k m² (内 2k m²建物用地)
- ・農地被害…………水田約 7 割 340ha
- ・水産被害…………養殖筏全壊 (カキ、ホタテ、ワカメ)、船舶被害 1,358 艇
- ・商工業被害…商工会会員 699 中、会員被災…604
 - 再開・継続…334 未再開………… 50
 - 廃業……………186 転出…………… 27
 - 不明…………… 7
- ・博物館、図書館、寺院等が破壊され、貴重な歴史・文化の資料が消失

○犠牲者

陸前高田市 1,763 人 (内、行方不明者 206 人)

職場・町内会の管理職・役員の人達が多く犠牲となる。

消防団員殉職者………… 34 人

市職員……………111 人 (正職、臨時、嘱託含 443 人中)

民生委員…………… 11 人

東日本大震災全地域…死者 15,889 人、行方不明者 2,601 人

ほとんどが ・岩手…4,672 人、1,132 人

・宮城…9,538 人、1,261 人

・福島…1,611 人、 204 人

○想定外といわれた津波は残された人達に想定外となる生活を強いた。

仮設住宅設置場所 53 ヶ所

2015年1月末現在 1,695戸、4,178人（当初2,168戸、5,505人）
見做仮設 107戸、301人

- ・被災しない学校の校庭、仮設住宅
…グラウンドを使用する授業や部活に支障
- ・電気2ヶ月、水道3ヶ月…不通
- ・避難場所と避難所の課題
- ・火葬場、埋葬の課題
- ・身元不明遺骨の対応
- ・時薬…時間の経過は悲しみを和らげるが、決して忘れさせることは
出来ない

○津波と学校

全壊…小学校1、中学校3、高校1
半壊…中学校1

学校統合…小学校9 → 6
…中学校6 → 4

犠牲者…小・中学生19人、高校生22人

岩手県内…小・中学生犠牲者19人
…両親を失った孤児96人、父母の何れか476人
全体… " 241人、 " 1,498人

○三陸沿岸は歴史上、何度も津波に襲われている。

代表的な津波…869年貞観、1611年慶長、1835年天保、1856年安政、
1896年(明治29年)、1933年(昭和8年)、
1960年(昭和35年)

【先人の遺した津波への教訓】

△津波の避難は距離より高さ

- △津波てんでんこ
- △二度逃げ
- △川沿いには逃げるな
- △逃げたら戻るな

【津波石の教訓（岩手県沿岸 77 ヶ所）】

- ※ここから下に家を建てるな
- ※地震あったら高い所へ 遠くへ逃げては追い付かれる
- ※100回逃げて100回こなくても、101回目も逃げろ
- ※大津波 三、四十年後に又来る

etc...

【防災から減災へ】

- 永い時間の経過と人々の心の風化
- 防潮堤神話
- 防災訓練のセレモニー化
- 自然災害に最高、最大、最後は無い
- 家庭、職場、コミュニティー、学校等での意識の啓発と継続
 - △釜石の奇跡
- 自然に対する畏敬の念、自然との共存
- 災害に強い「まちづくり」と災害に強い「ひと」づくり
- 自助・共助・公助、防災は総力戦

【現在と今後の課題】

- 町内会、自治会と再構築
 - △100%以前と同じ町内会は実現しない
 - △地域の伝統行事や伝承芸能継承の危惧
- 仮設、公営住宅での孤独死
 - △意識と経緯の格差
- 仕事を失った生産年齢層の人達の他所への流失は否めない
- 復興は数字ではない。人々の「こころ」の復興が伴わないと真の復興はありえない。
 - ※グリーンケア…自死、孤独死、ひき籠り
 - ※遠野物語 第99話

【将来への希望】

- 「絆」ということばの意味

○やなせ たかし「絶望のとなり」

絶望のとなりに誰かが腰かけた。

絶望はとなりの人に聞きました。

あなたいったい誰ですか。

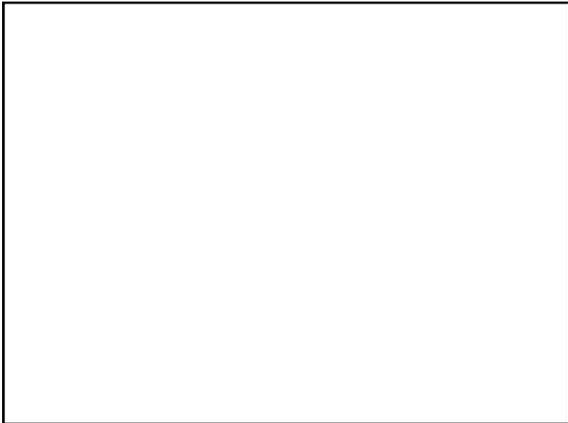
となりの人は、にっこり笑って言いました。

私の名前は希望です。

○東北人は永い歴史の中で、これまで何度も絶望を希望へと変えて生き抜いて来た。

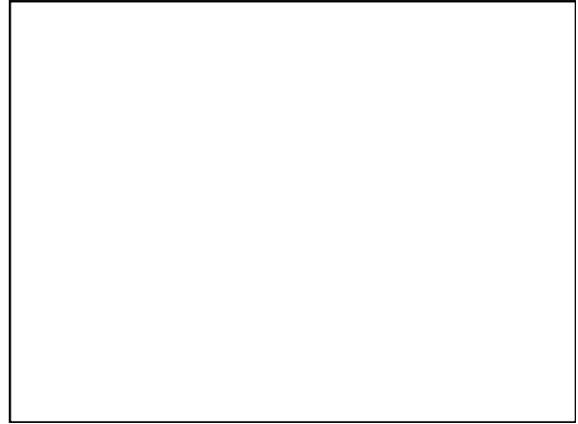
○私達が前へ歩みだそうとする原動力は？

3

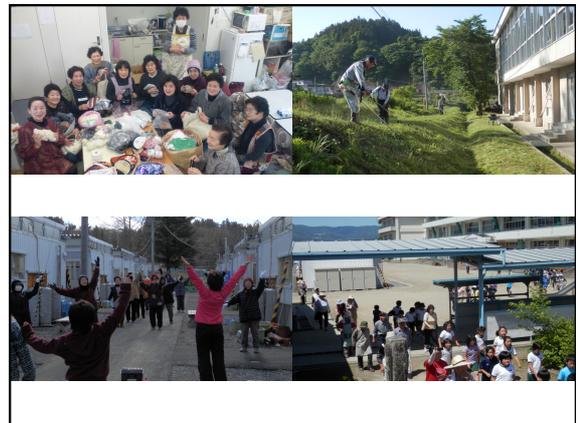


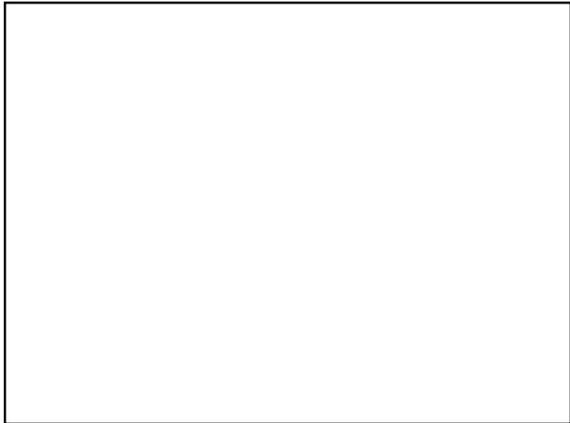
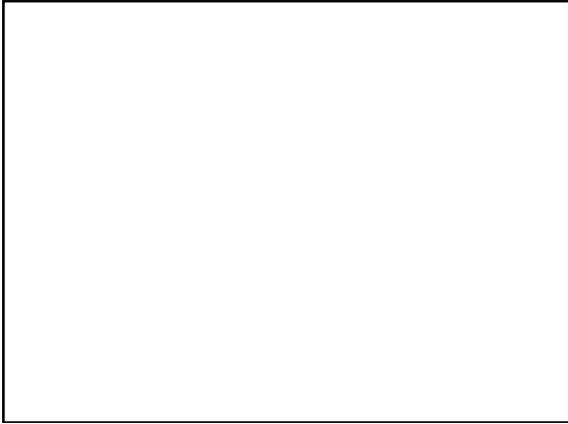
2011 3 12





2011 5 3
6 10
6
8 14







新しい生き方、働き方を創る ～陸前高田市広田町での挑戦～

2015.3.10
特定非営利活動法人SET
三井俊介



目次

1. 自己紹介
2. 組織概要
3. 目指すこと、実績
4. 活動内容
5. 4年間の学びと大切にしてきた事



2

1.自己紹介

- ・1988年12月23日、茨城県つくば市で生誕。サッカー部に所属。
- ・法政大学国際政治学科入学
- ・「サッカー×国際協力」WorldFut創設
- ・2012年3月、法政大学卒業
- 4月、陸前高田市に移住
- ・2013年6月、特定非営利活動法人SET理事長に就任。



3

2.組織概要

4

2.組織概要

設立 | 2011年3月13日 (法人化は2013年6月18日)

運営 | 約70名 (内有給職員2名)

(首都圏の大学生・社会人38名、定住組2名、住民30名)

■代表理事 (現地統括) 三井俊介 (法政大学卒)

■代表理事 (東京統括) 吉田勇佑 (明治大学卒)

活動拠点 | 東京、岩手県陸前高田市広田町



5

3.目指すこと

6

SETが目指す事

【Mission(どんな社会を創りたいか?)】
一人一人の「やりたい」を「できた」に変え、
日本の未来に対して、「Good」な「Change」が
起こっている社会を創る!

【Vision(そのためにSETは何をするか?)】
自分らしく、社会を創る生き方、
働き方をする人を増やす。

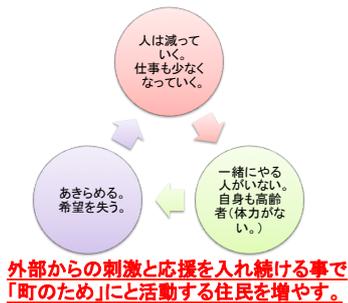


広田町

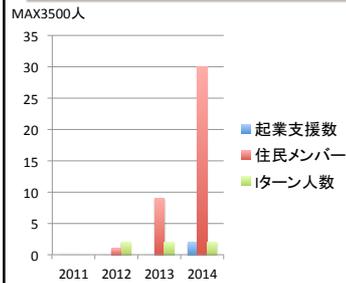


課題認識

■「広田の為」と活動する人が少ない。



4年間の活動実績



【その他の実績】
・東京運営メンバー 30名
・来町した方 約1000名
・メディア掲載 35回

町内で8つのプロジェクトチームが設立されました。



4.活動内容

2011/3/11 東日本大震災発生



2011/3/13
復興支援団体SET設立・今できることを



13

2011/4/6
陸前高田市広田町という町との出会い



14

2011/4/6
圧倒的な現実・絶望感



2011/4/7
受け入れ拒否、「人」として関わる



16

2011/4/19
自身の無力感、人間の力の小ささ、
町の方々の笑顔



17

2011/4~2012/3
地域に密着したサポート活動



**「50年後、この町は
無くなってしまふかもしれない。」**



**「生きたい場所」と思えたからこそ。
若者がいないからこそ。**



**2012/3月末
創設メンバーは社会人に。
三井は単身、広田町に移住。**



**2012/4
広田パソコン教室設立**



**2012/4月～9月
幅広くニーズを聞き、活動を行う。**



加工場建設事件



民泊ハブ事件



25

恐怖の手紙事件



26

想いの再確認

6ヶ月経った今、改めて自分自身の無力さを痛感しています。

社会人経験もない若者が、被災した地方で、なおかつ震災前からの問題が根深い地域で、復興・活性化に貢献していくこと、それもボランティアではなく、事業として行っていく事がどれだけ難しいか。

地域のしがらみや田舎での礼儀、物事を進める手順も分からない。折れそうになる事も何度もある。嬉しい事、理不尽な事、たくさんたくさんある。

このイベントで原点に立ち返れた。

「迷な歩道を行く」

その覚悟をしたのが、今回の「移住」という選択だったんじゃないのか？

自分の無力さを知りながらもあえて挑戦したんじゃないのか？だからこそ、今たくさん問題があるのは当たり前のんじゃないのか？でもそれを謙虚に受け止め、それは全て自分のせいと反省し、次への糧にしなければならぬんじゃないのか？

移住して、6ヶ月目。改めて原点に立ち返ってがんばろう。一歩づつ行かない。だからこそ、人生は楽しい。

27

2012/10 野菜の発送サービスを思いつき、 地元の方と「できない」を「できる」に！



28

手作り浜野菜事業「おすそわけ便」 (新鮮野菜の発送サービス)



29

2012/11 挑戦の場をつくらう！

チェンジメーカープログラム (CMP)

外部の若者(大学生)が1週間広田町に滞在し、広田町の方と共に、課題解決アクションを実行する。



30

内容



2013/3 第1回開催！感動の場に。



32

2013/9 CMP第2期。地元の方の挑戦。



33

2014/3~9 第3期~第4期CMP 広田スタッフの方の思いを形に。



34

2015/3 町内初の美術館、「三陸館」開館

三陸館 2015年3月1日、開館
SANRIKUKAN
高山孝一さんの絵画を観る

開館日——毎日毎日
開館時間——午後1時～午後4時頃まで
入館料——1人200円

35

CMP卒業生コミュニティ！ 学生部と合わせて50名以上に。



36

**「高田と僕らの未来開拓プロジェクト」
子ども達は町の希望。**



37

**高校生と大学生で住民で、町中を
サンタになってプレゼントを配る。**



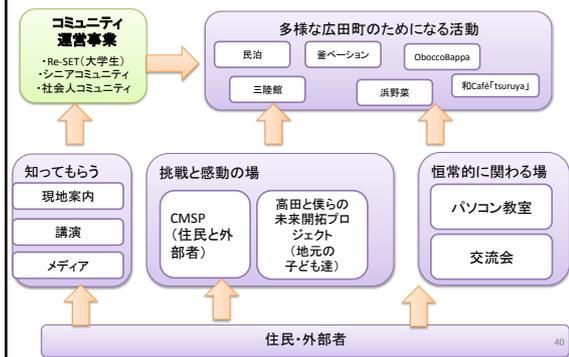
38

様々な取り組みがスタート



39

まとめ



40

5.4年間の学びと大切にしてきた事

41

挑戦と感動が人々の行動を変える。



一人一人に寄り添う。



「楽しく」やる！



44

今はない仕事や働き方を創りませんか？



(News ZEROより)

45

ご清聴ありがとうございました！



46